

むかしの
道具もぐらとくらし



日光市歴史民俗資料館

むかしの道具とくらし

はじめに

わたしたちのくらしは、時代とともに便利になってきました。学校や家では電気、水道、ガスなどを使うことができます。これらが使えなかった時代のくらしを考えてみましょう。

電気のちから

電気を使うことによって、暗いときには明るい照明をつけることができ、寒い日にはさまざまな暖房により暖まることができます。炊事（調理）、掃除、洗たくなど、家のなかの仕事も私たちのかわりにさまざまな電気機械がやってくれます。

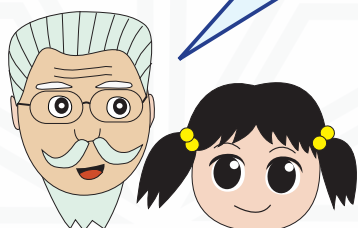
それでは、電気はいつごろから使うことができるようになったのでしょうか？

日光市に発電所がつけられたのは1893（明治26）年のことでした。明治時代の終わりと（1907年）からは、ふつうの家でも電気が使えるようになっていきました。

電化製品もつぎつぎに開発されていきましたが、多くの家で使うことができるようになったのは、日本の経済が豊かになってきた1950年代以降のことでした（水道やガスが使えるようになったのもこれ以降のことでした）。

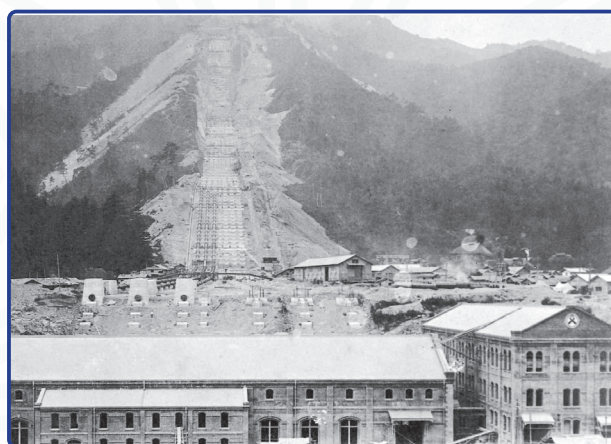
電化製品がない時代には、人々はさまざまな道具を使って生活していました。電気やガスのかわりに何を使っていたのでしょうか？

資料館にある、むかしの道具をみながら、当時の人々のくらしを考えてみよう！



↑杉のはをひろう女性（昭和30年代）

昔は、杉並木の落ちた杉のはを拾ってお風呂やカマドの焚きつけに使いました。



↑大正元年ごろの下滝発電所

現在の東京電力鬼怒川発電所のような。今の鬼怒川温泉付近には、東京へ電気をおくるため、大きな水力発電所がつけられました。

あかり

電気が一般的に使えるようになるまでは、家庭で使うあかりといえば「火」です。
むかしの照明器具は、風などで火が消えるのをふせぐ工夫がみられます。

むかしの照明

◆ロウソクのあかり◆

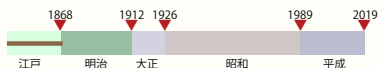


ロウソクは、仏教とともに中国から日本へ伝わったと考えられています。
江戸時代後期には、日本の各地でつくられるようになり、庶民の間に広がりますが、当時はまだ高価なものでした。

あんどんは、江戸時代に各家庭で使われるようになりましたが、ほのかなあかりで部屋全体を明るくすることはできませんでした。



しよく台



ロウソクは、しよく台とよばれる台に立てて火をともしました。

◆石油のあかり◆



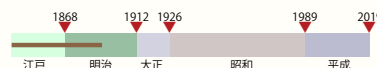
石油ランプは江戸時代の終わりがから明治時代にかけて外国から日本に伝わり、電気による照明器具が普及するまで、さかんに使われていました。

大正時代には、ほとんどの家庭で電灯が使われはじめますが、電気代が安く、明るい蛍光灯が広まったのは1950年代以降のことでした。



↑火をともしたようす

あんどん



中にロウソクを立てたり、植物や魚からとった油をさらに入れて芯をひたし、それに火をともしました。
風などで火が消えないよう、まわりを和紙でおおっています。

つり手

ここにひっかけてつるす。

ほや

ガラス製で風で火が消えないようにする役割がある。

ネジ

ネジを回すと芯の長さを変えることができます。
芯が長いと明るく、短いと暗くなります。

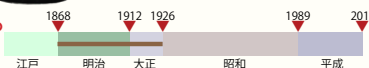
しん芯

あぶらつぼ油壺

ここに石油などの燃料をいれる。



石油ランプ



石油を燃料に、もめん糸であんだ芯に火をともしてあかりにします。天井からつりさげて使いました。

むかしの家はどんな家

昭和の中頃までは、米や野菜などをつくってくらす農家が大半でした。ここではむかしの農家の家のつくりをみてみましょう。

農家の家のつくり

広い庭に平屋の家

むかしの農家は、木造の平屋（1階建て）で、屋根は近くでとれるかや（ススキなどのイネ科の植物）を使ったかやぶき屋根や、稲わらを使ったわらぶき屋根がほとんどでした。

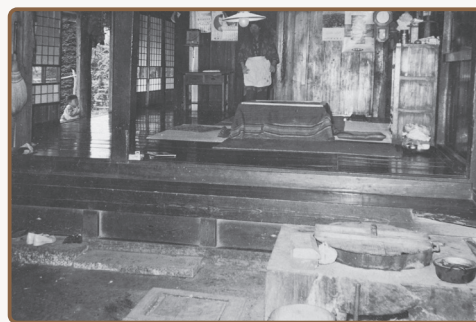
広い庭には、家族が住む家（母屋）とは別に、農具や取り入れた農作物ををしまっておく物置（納屋）、便所などがありました。

農家の家の中

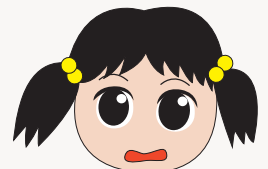
家の中には広い土間があり、そこに台所がありました。土間より高いところには、たたみの和室や板の間がありました。風呂は入り口のわきか馬屋の横に設けました。



↑むかしの農家の家（報徳仕法農家）



↑→家のなかの様子

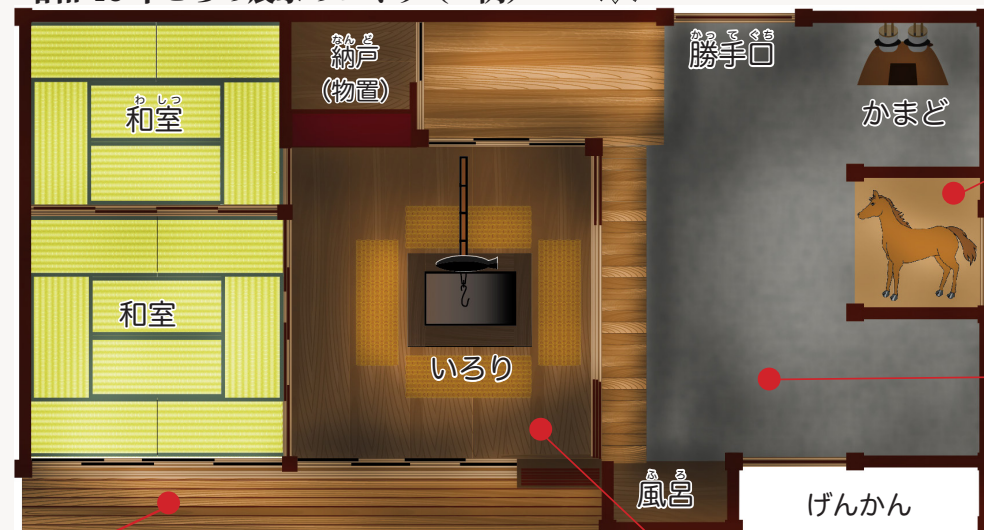


なんで家のなかに馬がいるの～



馬が農作業をてつだってくれたんじゃ。

昭和40年ころの農家のつくり（一例）



お勝手（台所）
炊事（食物の調理）
仕事をするところ。

うまごや

農家では家の中で馬をかっていました。馬の力は農作業に欠かせませんでした。

どま

家の中の地面をかたく固めたところ。作業をしたり、ものを置いたりする場所。

えんがわ

庭に面した板張りの廊下。庭から直接室内に入ることができ、農作物を干したりする場でもありました。

板の間

板をはった床の部屋。いろりがあり、家族が食事をする場所。



てんじょうが高いので夏でも意外とすずしいんじやよ。

調理する

今もむかしも料理をつくるには、火が必要でした。電気もガスもない時代、台所ではどのような道具が使われたのでしょうか。

いろり

家族が集まる団らんの場所

電気がない時代は火が使われていました。むかしの家にはいろりがありました。いろりは部屋の床などを四角形にくりぬいて、そこでまきを燃やして火をたく場所でした。



↑いろりを囲む家族

移動式の調理道具

空気あな

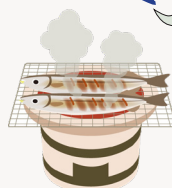
火力を調節するための空気あな。大きく開けて風をおくと火が強くなり、しめると弱くなる。



火しりん

炭を燃やして調理する道具で、もち運びができるところが便利です。魚を焼いたり、食物の煮炊きにも使われました。

けむりがでるので、外に運んで魚を焼いたんじゃ。



いろりで使われた道具

自在かぎ

この先になべなどをひっかける。名前のとおり、長さを自在に変えられるので、火との距離を調節することができます。

よこぎ

自在かぎを好きな位置で止めるためのストッパー。魚などの彫刻がついています。



なべ

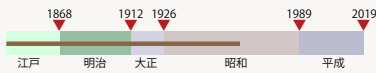
自在かぎにかけて、食物の煮炊きに使われました。



鉄びん

自在かぎにかけて、水を入れ、お湯をわかすために使われました。

かまど



強力な火でおいしく調理

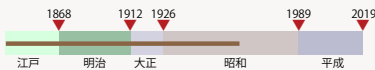
むかしの台所は土間にありまし
た。かまどは、土やレンガなどでお
おいをつくり、下からまきを燃やし
て、上にはがまやなべをのせて調理
していました。ごはんをたく、お湯
をわかすなど、今でいうガスコンロ
の役目をしていました。



↑報徳今市振興会館にあったかまど (昭和 30 年代)

◆ごはんをたく道具◆

はがま



かまどをつかっていた頃のごはんをた
く道具。かまどの口にひっかけられる
よう、羽のようなつばが付いていて
いることからこの名前がよばれました。



ふた

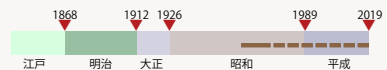
強く吹き出す蒸気をおさえるため、厚く
て重い木のふたがついていました。

かまどの時代

火加減を見ている必要があり、ごはんをたく
にも手間がかかりました。使うたびにスデ
まっ黒になるため、洗うのも大変でした。



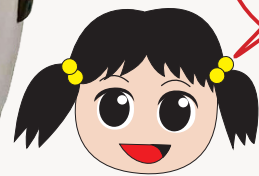
でんきすいはんき 電気炊飯器



電気を使ってごはんをたきます。中の容器
に水と米を入れ、スイッチを入れるだけで
ごはんがたけるようになりました。



↑昭和 30 年代製



今でもはがまや
かまどの名前が
ついた製品があ
るよね。

げんざい 現在は？

かまどの時代の人が目で見えて火加減を
調節していたように、コンピュータが
自動的に調節するようになりました。

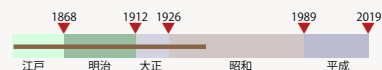


◆食事に使った道具◆

江戸時代のお終りから明治時代にかけては、一人が1つのぜん（食器をのせる台）を使って食事をしていました。



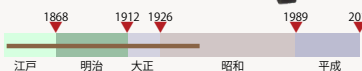
はこぜん



ふだんは中にちawanやはしなど、一人分の食器が入っています。ふたを裏返してはこにのせ、上に食器をならべて食事をしていました。



おせん

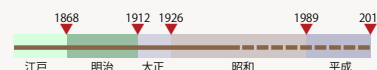


結婚式やお葬式など、多くの方があつまるときには、この上で食事を食べてもらいました。

おひつは、今でもりょかんやホテルの食事で見かけるじゃろ。



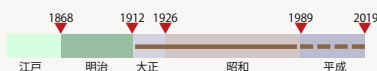
おひつ



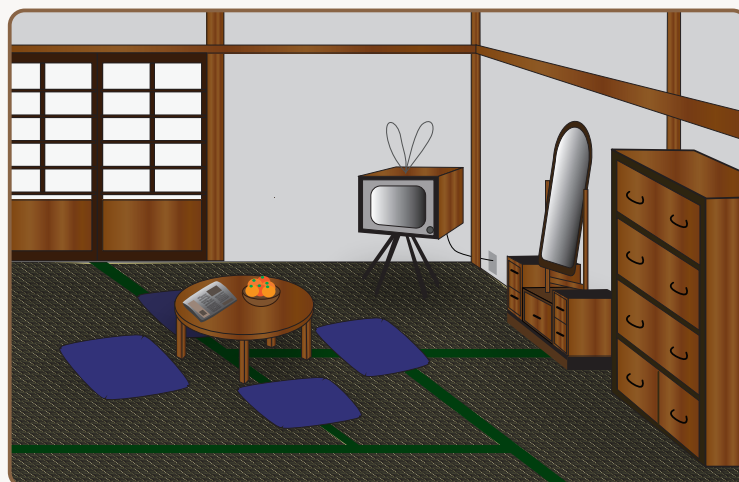
かまどでたいごはんをうつして、食事場所に運ぶのに使われました。



ちゃぶ台



すわって使う食卓（テーブル）です。最初は角型でしたが、時代とともに丸型が使われるようになりました。



↑昭和40年代の茶の間のイメージ

昭和の中頃には、家族がちゃぶ台を囲んで食事をするようになりました。

洗たくする

水道や洗たく機、電気アイロンがなかった時代には、どのように衣類などの洗たくをしていたのでしょうか？

一枚ずつ手であらう大変な作業

洗たく機が普及したのは、昭和 30 年代の中頃です。それまでは、木製のたらいと洗たく板を使って衣類を洗っていました。手で行うため、家族みんなの衣類を毎日洗うには、時間と力もある大変な作業でした。

石けんが家庭で使われるようになるのは、

◆洗たくに使った道具◆

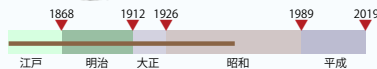


明治時代の中頃からですが、当時は貴重なもので、汚れのひどいものや白いものを洗うときに、大切に使われました。



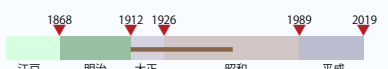
↑たらいと洗たく板で着物を洗う女性 (明治時代)

①たらい



たらいは、水をためるための入れもの。ほそながきいたえんとうけいじょうぶな鉄線などでしめてつくられています。

②洗たく板



洗たく板は洗たくものをのせて、汚れをもみだす道具。水でぬらした衣服を表面のみぞにこすりつけて洗います。

電気洗たく機



昭和 30 年代



洗たくが終わると 2 本のローラーに洗たくものを通し、ハンドルを回すと脱水ができました。

電気を使って洗たくをします。洗たくものと水と洗剤を入れてダイヤルを回すと短時間できれいになります。

昭和 40 年代～



洗たく機に脱水槽がつけくえられ、脱水も自動でできるようになりました。

現在は？



スイッチを押すだけで、洗うことから乾燥まで、すべて自動でやってくれます。

シワをのばす

電気のなかった時代、炭火の熱と道具の重さで布のシワをのばしていました。火のしやこては現在の電気アイロンに代わる道具で、その歴史は古く、今から1000年以上前の平安時代から使われており、江戸時代の中頃に普及しました。

アイロンは明治時代に洋服といっしょに外国から伝わってきました。当時のアイロンは温度の調節がむずかしく、ぬらした布をおいたり、きり吹きを使ったりするなどの工夫が必要でした。



火のし
1868 1912 1926 1989 2019
江戸 明治 大正 昭和 平成

中に炭火を入れ、布に当てて熱でシワをのばします。



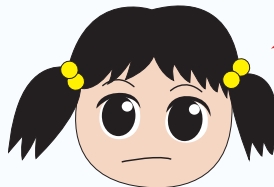
こて
1868 1912 1926 1989 2019
江戸 明治 大正 昭和 平成

ひばちに入れて炭火であたため、布に当てて熱でシワをのばします。



炭火アイロン
1868 1912 1926 1989 2019
江戸 明治 大正 昭和 平成

中に炭火を入れ、布に当てて熱とアイロンの重みでシワをのばします。燃やした炭火を入れるので、煙突と空気あながあります。



むかしの洗たくはたいへんな作業だったのね。
おばあちゃんにもきいてみよう。



電気アイロン
1868 1912 1926 1989 2019
江戸 明治 大正 昭和 平成

電気を使ってあたため、布に当ててシワをのばします。昭和の始め頃に広まり、炭をおこす手間がはぶけました。そのあと温度の調節ができるようになります。スチームアイロンが登場すると、きり吹き作業がいなくなりました。

※炭火（すみび）とは？

木炭→（木材をむし焼きにしてつくった炭）
でおこした火のこと。



暖まる

むかしの家は立て付けが悪く、すきまも多かったので、寒い冬を乗り切るのは今以上に大変なことでした。寒い冬、家の中ですごすための道具をみてみましょう。

手足を暖める道具

むかしの暖房器具は、部屋全体を暖かくすることはできませんでした。暖をとるための火はいろいろが中心でしたが、もち運びができる火ばちは室内で手を暖める時に、あんかは足を暖めるこたつとして使用しました。このほか、寝る時にふとんの中に入れて足もとを暖める湯たんぽは、冬の寝室に欠かせないものでした。電化製品が普及していなかった時代、これらの燃料としてすみ火や豆炭、練炭などが使われました。



火ばち

中の炭火で手足を暖められます。ごとくに鉄びんをかけてお湯をわかしたりもできました。木製や陶器製、かたちなど様々です。

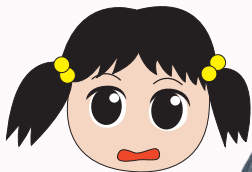
やぐら

この上にふとんをかぶせる



あんか

炭火を入れたさらを木製や土製の容器に入れたもの。これをやぐらの中におさめ、ふとんをかぶせると炭を使ったコタツになります。



私、プラスチックの使ってるよ。



湯たんぽ

中にお湯を入れて、布でつつんで使いました。陶器製のものは江戸時代に普及し、後に金属製のものも出まわようになりました。



豆炭 = 石炭の粉と海藻を原料としたふのりをませ、乾燥させたもの。

豆炭

豆炭あんか

中の石綿の上に、豆炭という燃料を入れて使います。ふとんの中で足を暖められます。

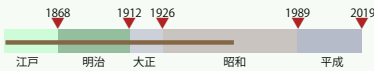
はきもの

むかしの日本では、靴をはくという習慣がなく、ふだんは足の甲をおおわないタイプのはきものをはくのが普通でした。

自然の素材で快適

日本人が現在のように靴をはくようになったのは、戦後（太平洋戦争後）になってからです。それ以前は、着物を着る人が多かったので、ほとんどの人がげたやぞうりをはいていました。これらのはきものは、木やわらなどの植物からつくられていました。足の全体をおおわず、通気性にすぐれているので、湿気の多い日本の気候にあっていました。

ぞうり



わらや竹の皮などを編んだ台に鼻緒をつけたもの。昔の農家では、稲わらを使って自分で作りしました。



- ①ぞうり (日常)
- ②足なか (働く時)
- ③わらぐつ (雪の時)

大きさが足のうらの半分しかないので、「足なか」と名前がついておる。足に密着して、ふんばりがきくそうじゃよ。

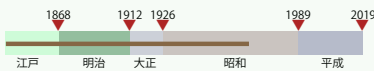


↑わらじのはき方

ひもをくるぶしのあたりまで巻きつけて、しっかり結んでいきます。



げた



木の台に鼻緒をつけたものです。裏には歯とよばれる板がついていて高さがあります。農家では外出やハレの日のはきものでした。



女の子用の
げたね♡



ぽっくり

日光げた

雪や坂の多い日光の地形や気候などに適したつくりになっています。



しまう・保存する

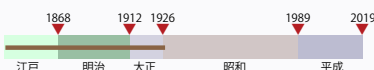
ものをしまったり、保存する道具は、ものによってむかしからさまざまな工夫がされてきました。

木でつくられた入れもの

衣類をしまうものは、タンスやながもち、こうりなどがありました。おけやたるは、水や食物などを運んだり、ためておくために使われました。食物をいたまないように保存することは、くらしの中で重要なことでした。電気冷蔵庫が普及するまでは、置き場所などを工夫したり、氷や井戸水などで冷やしたりしました。

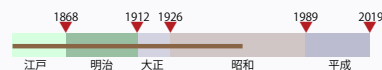


ながもち



フタのついた大きな木の箱。ふとんをしまったり、嫁入りのときに使われました。両脇についた金具に棒をとおし、二人でかついで運びました。

こうり



柳や竹などを編んでつくった箱で、今の衣装ケースのようなものです。



フタが取りはずせるのがおけ、フタが固定されているのがたるとよばれておる。



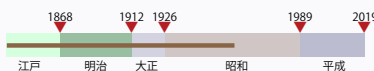
大きな氷のかたまりを入れる。



食物などを入れる。

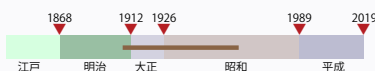
外側は木でできているのね。中にはブリキがはってあって、冷たい空気を逃しにくくなっているわ。

ておけ



井戸や川からくんできた水を運ぶために使われました。

氷冷蔵庫



上の段に氷を、下の段に食品などを入れます。下の段に降りてくる冷やされた空気で中のものを冷やしました。

おもな家庭用機器

家庭に登場したさまざまな機器は、人々の生活に大きな影響を与えました。

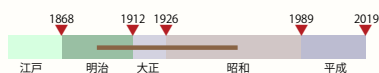
電話で話す

日本ではじめて電話が使えるようになったのは、1800年代の終わり頃、今からおよそ150年前のことです。そのころは、ハンドルを回して電話局の電話交換手をよび、相手の番号をつけてつないでもらいました。その後、1923(大正12)年の関東大震災の復旧をきっかけに自動式の電話交換機が採用されます。

1960年代には、一般家庭に置かれるようになりましたが、現在のように全国各地域へ自動で相手に電話がかけられるようになったのは、1979(昭和54)年のことです。



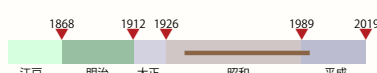
かべかけ式電話



受話器を耳にあて、送話器に向かって話します。



ダイヤル式電話



数字のそばのあなに指を入れて時計回りにダイヤルを回してかけます。

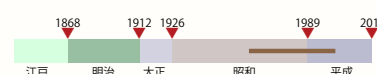
テレビをみる

昭和30年代に入ると、一般家庭へ家電の普及がはじまります。中でも白黒テレビは、冷蔵庫・洗たく機とあわせて「三種の神器」とよばれ、やがて家庭の必需品になりました。

白黒テレビが登場してから7年後の昭和35(1960)年には、日本のカラー放送がはじまり、家電はさらに大きな進化をとげていきます。



ブラウン管テレビ



リモコンではなく、このツマミを回して、番組をかえる。

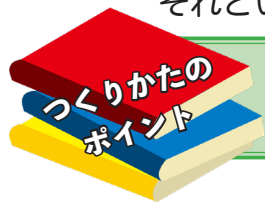
画面にブラウン管というラッパのような形の部品が使われていて、現在のテレビに比べて奥行きがあります。



今でもチャンネル回してって言うよね。

むかしの道具とくらしについて、^{どうぐ}年表をつくってみましょう！

道具がどのように^か変わったかをしらべて年表にまとめてみよう。
それといっしょに世の中の^{よなか}うつりかわりもしらべてみよう。



①時代と今から何年前かを書く。

②だれが子どものころだったかを書く。

③世の中のできごとを書く。

④しらべた道具のうつりかわりやくらしのようすを絵や文をかいりたり写真をはったりする。

①時代	およそ何年前	②だれのところ	③日光市のくらし (※地域により異なります)	④洗たく道具のうつりかわり	調理道具のうつりかわり
明治 1868 ～ 1912	150 年前	ひいおばあさん	・日本鉄道日光線（現 JR）開通（1890） ・電灯がついた（1893） ・電話が開始された（1902）	 ↑たらいと洗たく板	 ↑イロリ
大正 1912 ～ 1926	100 年前	が子どものころ	・足尾鉄道（現わたらせ渓谷鉄道）が開通（1912） ・東武日光線が開通（1929）	 ↑ヒノシ ↑コテ	 ↑ナベ
昭和 1926 ～ 1989	50 年前	おばあさんが子どものころ	太平洋戦争（1941～1945） ・水道がとおった（1954） - 電気・ガスが普及した ・電話の自動化（1963）	 ↑すみ火アイロン 電気洗たく機の登場（1930） ↑スチームアイロン（1954～） 一そう式洗たく機（1954） ↓二そう式洗たく機（1960～）	 ↑ハガマ ↑自動式電気炊飯器の登場（1955） 自動保温式電気炊飯器（1965）
平成 1989 ～ 2019	30 年前	お母さんが子どものころ	・下水道の開始（1981） ・野岩鉄道が開通（1986）	 全自動洗たく機（1965～）	 ↓IH 炊飯器（1988～）
令和 2019 ～	現在（0）	わたしたち	・日光市合併（2006）	 ↑ドラム式全自動洗たく機	

高度経済成長期
(1955～1973)

しらべたことをまとめよう！

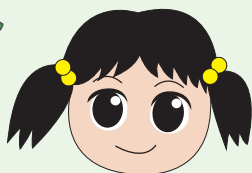


しらべて気づいたことを、ことばでまとめてみましょう。

A large rectangular area with a green border, containing multiple horizontal dotted lines for writing.



資料館にむかしの道具をみにいこう！



むかしの道具や暮らしについて、
もっと知りたくなったら、近くの
資料館に行ってみよう！

日光市歴史民俗資料館

日光市の古代から近代の歴史を、日光山
(東照宮や輪王寺)を中心に展示・解説し
ています。むかしの道具などの資料も数多
く展示しています。

- 日光市今市 304-1
- 開館時間：9時～17時
- 休館日：月曜日・祝日の翌日
(土日除く)・年末年始



報徳仕法農家住宅 (市指定有形文化財)

江戸時代の終わり頃の建物を移築・
復元して公開しています。当時の農家
住宅の機能と構造をみることができます。

- 日光市町谷 1866-1 (かたくりの湯敷地内)
- 開館時間：9時～15時
- 休館日：月曜日 (月曜祝日は翌日)
年末年始



郷土資料館 仲附の旅籠

江戸時代から明治時代にかけて、会津
西街道を往来する馬ひき(運送業者)た
ちが利用した宿泊所です。建物の中には
道具などの資料も数多く展示しています。

- 日光市藤原 19
- 開館時間：9時～16時
4月～11月：月・金・土曜日開館
12月～3月：毎週土曜日開館

